多賀小

進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成
～一人一人が考えをもち、表現できる授業づくり～

（２年計画の２年次）

校長　　安田　俊彦

１　研究主題について

本校では、教育目標「夢や志をもち、共に高め合う児童の育成」を掲げ、それを受けて努力目標を「考える子・やさしい子・すこやかな子」としている。また、めざす児童像を「主体的に学び合い考えを深める子・素直な心をもち自他を大切にする子・健康な生活を送り心身ともにたくましい子」とし、知育・徳育・体育の各部会が具体策を提案し、職員全体の共通理解の下、知・徳・体の調和のとれた児童の育成を図っている。

昨年度は、主体的な伝え合い・学び合いを支える手立てや工夫として、必要感のある課題設定や思考の根拠をもたせる活動を設定することに取り組んだ。また、ネームプレートやジャムボードの活用など、自分の立場を表明させたり、一人一人に意見や考えをもたせたりするために各学級の実態に合った取り組みを共有してきた。

その結果、児童が必要感や問題意識をもち、主体的に学習に向かう姿が見られるようになった。また、共感的な態度で学び合う場の工夫を継続し、ペアや少人数で話す場を設定してきたことで、発表が苦手な児童を参加させることができ、共に学び合う姿に近づいてきた。

しかし、進んで考えを伝えたいという意欲が高まってきたと同時に、考えを整理して話すことができず、まとまりのない伝え方になってしまうという課題が挙げられた。内容を整理し、相手意識をもたせるなど、伝え方についても研究を深めていく必要がある。また、各学級に学習に困難さを抱える児童が多く、特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりについて研究を深めていく必要性も挙げられた。

そこで今年度は、昨年度までの研究を踏まえながら、表現する場の設定の工夫とＵＤに基づく授業づくりに取り組むこととした。学習上の困難さが見られる児童だけでなく、全ての児童の学習の意欲が高まり、学習の理解も深まる授業づくりについて実践を重ねていきたい。授業研究での成果を日常の授業実践に生かし、進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成に努めていきたい。

２　研究のねらい

進んで考えを伝え合い、共に学び合う子を育成するための学習指導の在り方を、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

表現する場の設定の工夫とＵＤに基づく授業づくりについて研究を進めることで、一人一人が考えをもち、表現することができ、「進んで考えを伝え合い、共に学び合う子」を育成することができる。

４　研究内容

(1) 表現のさせ方や場の工夫

ア　必要感のある課題設定
イ　伝える相手の明確化
ウ　ねらいに応じた学習形態（ペア・グループ・全体）
エ　具体物・ホワイトボード・ＩＣＴ等の使用

(2) ＵＤに基づく授業づくり

ア　焦点化（シンプル）　学習のねらいや活動を絞る。
イ　視覚化（ビジュアル）授業における情報を見えるようにする。
ウ　共有化（シェア）　話し合う、伝え合う、協力し合う場面を設定する。

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名
6	8	教育指導課・総合教育センター訪問　全学級授業
9	１３	第１回授業研究（３学年）　授業者　髙橋　祥子　社会科「よく行く店」
１１	8	第２回授業研究　（５学年）授業者　横内　佑依　算数科「がい数とその計算」

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
6	２１	気になる子へのアドバイス　講師：八戸学院短期大学部　幼児保育科 教授　野口　和也　氏
7	5	１人１台端末の活用 情報交換
8	２７	県学力状況調査の分析・考察
9	２７	特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり　講師：教育指導課 主任指導主事　青木　拓哉　氏
１１	1	「Khoot!」「Padlet」の体験とその活用　講師：本校教諭　横内　佑依
2	２８	県外研修報告会

６　研究の成果

(1) 選択肢を与える、クイズ形式にする、近くの人と相談させる等、表現のさせ方を工夫したことで、自分の考えを伝えられるようになってきた。また、ペアや小グループなど、ねらいに応じて学習形態を工夫したり、早く解き終わった児童同士が意見交流する場を設定したりすることにより、一人一人が考えをもち、表現できるようになってきた。

(2) ＵＤに基づく授業づくりについて研修を重ね、焦点化、視覚化、共有化を重点に授業づくりを行った。意図的、継続的に図や写真を活用をすることで、一人一人がイメージをもって学習に向かうことができた。また、ＩＣＴを活用することで、それぞれの考えを共有しやすく、話すことが苦手な子にとって表現しやすくなり、共に学び合う姿に近づいた。

７　研究の課題

(1) 一人一人が考えをもち、表現できるようになってきたが、それを全員で共有する場や振り返りの時間がもてなかったという課題が明らかになった。今後は単元を通して、学習のねらいを明確にし、どのような学習活動に時間をかけていくかなど、導入や振り返り場面を含めた単元計画の作成の仕方についても研究を深めていく必要がある。

(2) ＵＤに基づく授業づくりについて振り返った際、「焦点化に関して意識をさらに高めたい。」「情報や説明が過多になりがちだった。」という課題が挙げられた。児童の学習意欲を高め、理解を深めさせる指導方法を工夫していくために、今後も情報交換や研修を継続していく必要がある。

（　記入者　　石塚　里佳　）